

森田思軒父子の手紙

館長 富岡 敬之



森田佐平

明治8年(1875)2月13日、
笠岡の森田佐平は大阪慶応義
塾に遊学中の長男文蔵(のち
の思軒)あてに、「扱、此間は
祝融氏の災ニて大変ノ次第、
乍去義塾は固り、小島河吉大
野木等何レモ無異、先々大慶
也」と、塾付近の大火に際し
塾をはじめ森田家と関係ある
諸家の無事であったことを喜

び、さらに、「夫レニ付而モ以来右様ノ義出来候事、決而
決而其場へ近ツク可ラス。且此後万々一塾ノ近傍出火ノ
事有之共、軽卒ニ逃ケ走ル可ラス。心ヲ鎮メ、気ヲ平ニ
シ、進退総テ先生ノ傍ヲ離レズ、静ニ立退クヘシ」と、
出火の際の立ち退きは先生である矢野文雄(竜溪)の身
辺にあって、心を静めてその指示に従うようにとあり、
最悪の場合として、「或ハ一身ニテ去ルモ、方向ヲ見定メ
兎角風サ上ミノ静カナル街ヲ見留メテ先立退事。稍稍
鎮マルヲ俟テ、然後心指ス方へ参ルヘシ」と申し送っ
ている。注意が懇切をきわめているのは、後年の名翻訳
家森田思軒も、備中笠岡から上阪してようやく半年、当
時まだ15歳の田舎少年だったことによる。

明治9年(1876)11月8日付の東京慶応義塾在学中の
思軒あての手紙には、「陳ハ九州暴乱ニ付テハ新聞紙上種
種ノ説アリ。虚実相半ハス。(福山暴動倉敷近辺動揺等
ノ儀ハ皆虚也)……然処東国辺ニ於テモ少々動揺ノ県モ
有之様子、右ニ付如何様ノ義万一有之候共、決而狼狽ス
可ラス」と、ここでも平常心を論じ、そして「此義ニ付
テハ別紙書状ヲ以矢野前ノ令公及先生へ懇々御願申上置
候間、万御両所ノ御指図ヲ請ケ処分可被成候也」と、や
はり矢野文雄と、その父光儀(前小田県権令)の判断に
従うよう指示を与えている。熊本の神風連の乱、萩の前
原一誠の乱に関連して、若い思軒が時流に流されること
を深く懸念しているように見えるのである。あるいはまた、
それ以前の同年9月6日付の手紙には、読書の心得
を論じて、「聊幼年ノ節ハ、心魂飽テモ平和恭順ヲ旨トセ
サレハ往々帰着スル処ノ目的ヲ誤ルモノニテ、激烈ノ論

文ニ拘泥スルハ成丈避クヘキ事也。青年就学生ノ最注意
スヘキ所ナリ」と思軒に説いている。時勢に揺れ動く思
軒の高ぶりやすい若い心をかねてから警戒していたもの
と受け取れる。

ここに11月7日付の思軒の手紙がある。これは恐らく
前出の佐平の11月8日付書簡と行き違いになったもので
あろうが、思軒はその中に前記の乱について述べてお
り、「凡そ反賊兇徒の名を負ふ者ハ、政府に抗するに由
る。而して政府若し不正を人民に加へ抑圧を施すに至ら
ハ、人民之れに叛くも妨なしとす。如此きの時ハ名ハ叛
賊の醜称あるも、その拳正義に出るを以て与論之れを容
るし、公議之れを是とす。……之れを真の民権家愛国者
と云ふ」と、士族反動を否定しつつ、自由民権思想によ
る政府批判を展開している。森田佐平はすでに、やがて
燃えさかるであろう自由民権運動の高揚を予見していた
ようにも思われる。

〔参考〕 森田思軒関係書簡(「岡山県立博物館研究報
告」第1号)



森田思軒(15歳)

備中刀工・国重派 PART II

(S 56.5.26~56.7.26)

岡山県には、備前刀工と並んで、大きな勢力を持っていた備中刀工がいた。備前刀のあまりにも大きな影の中で、とかく忘れられがちであるが、備中には青江刀工とあって、平安時代からすでに優れた刀工集団がいた。

青江が現在のどこにあたるかについては二説がある。矢掛町横谷の草壁の荘か、倉敷市青江、つまり酒津の万寿の荘あたりのどちらかにいた青江刀工が国重派誕生の謎を解くカギを握っている。だがふしぎなことに青江刀工集団は室町初期に突然姿を消してしまった。そのわずかのち、戦国時代に入って、その青江の末流か、あるいは、そういう伝統のある素地の上へ、河野通信の後裔を名乗る備後刀工の井原、北房方面への移住か、ともかく備中一円に急に勢力をもってきた刀工集団がある。それが謎に満ちた誕生をもつ国重派である。作風は初期のものは戦国時代という状況を反映して、実用本位の未備前末三原風のものであった。そして、それらは毛利軍の中国支配という中で軍の最前線に兵器廠として国重刀工を配置した。

だから、その当時の主な鍛刀地は荏原、松山、砦部、水田である。大与五国重が登場してからは、備前の影響から離れ、作風も高温焼入れ処理のにえの荒い、派手な反りの少ない相州伝に変わってゆく。戦乱がなくなって以降



水田国重霊碑

刀工は摂津、江戸、奥州、相模、薩摩、石見、豊後、羽後、讃岐、備後三次、備中成羽等々全国へ散らばっていたのも大きな特色である。前回の井原に次いで、今回の国重展(Ⅱ)は、かつての一方の国重鍛刀地である北房町の地に伝わるものを中心に展示した。この二回の国重展で、国重刀のもつ特質についてせまることができたのではないかと思う。

出品目録

- | | | | |
|-----|--------------------------------------------------|---------------------------------------------------|---------------------|
| 1. | 短 刀 | 国重 | 室町末期 |
| 2. | (重刀)刀 | 備中国井原住国重作 | 室町末~桃山
馬屋原少輔四郎是好 |
| 3. | (重刀)脇差 | 備中国井原住国重作 | 室町末~桃山
馬屋原少輔四郎是好 |
| 4. | 脇 差 | 備中国水田住大与五国重 | 江戸初期 |
| 5. | 脇 差 | 備中国水田住大与五国重 | 江戸初期 |
| 6. | (重刀)刀 | 備中国水田住国重
大月与五右衛門作之
寛文八年二月吉日 | 江戸時代 |
| 7. | 脇 差 | 山城大掾源国重 | 江戸時代 |
| 8. | 短 刀 | 山城大掾源国重
延宝二年十一月十三日
備中松山住人
村山品之丞廿一条多久伊助秀次 | 江戸時代 |
| 9. | 短 刀 | 備中国水田住大月太兵国重 | 江戸時代 |
| 10. | 刀 | 備中国水田住大月茂右衛門尉国重作 | 江戸時代 |
| 11. | 脇 差 | 備中国水田住国重作 | 江戸初期 |
| 12. | 脇 差 | 備中国水田住国重 | 江戸時代 |
| 13. | 脇 差 | 備中国砦部住国重作 | 江戸時代 |
| 14. | 短 刀 | 備中国砦部住為家
寛永十九年二月日 | 江戸時代 |
| 15. | 脇 差 | 備中国砦部住為家 | 江戸初期 |
| 16. | 刀 | 備中国砦部住河野理兵衛尉為家 | 江戸時代 |
| 17. | 刀 | 備中国砦部住河野理兵尉家
寛文八年十月廿七日 | 江戸時代 |
| 18. | 脇 差 | 備中国砦部住河野理兵尉為家 | 江戸時代 |
| 19. | 脇 差 | 備中国砦部住為家 | 江戸時代 |
| 20. | 刀 | 備後国三次住水田国重 | 江戸時代 |
| 21. | 拵製作工程資料 (形取、引割、張り面仕上、刀身形取り、肉取り、貼合せ、白鞘仕上、柄巻、本拵完成) | | |
| 22. | 入れ子鞘 | | 江戸時代 |
| 23. | 火 繩 銃 | 備中水田住大月勝祐国重作 | 幕 末 |
| 24. | 国重鍛刀の図 | | |
| 25. | 職人尽絵(複製) | | |

沖 一 峨

(S 56.12.22~57.1.17)

本館では、昭和55年1月、県下日生町在住の柿崎信兼氏より、同氏の曾祖父・沖一峨(1796~1855)に関する絵画資料の寄託をうけた。一峨は、もと児玉貞(蔵)といい、鍛冶橋狩野家で修業後、鳥取藩江戸定詰絵師を勤める沖家に養子として迎えられた画人である。当館において整理を進めていたが、その成果の一部として、今回の展覧を企画した。ただし、柿崎家所蔵資料は画人の家に遺されていたという性格上、画稿(下図・粉本・縮図など)や印章等の資料は見出せるものの、完成作は無に等しく、一峨の全貌には到底触れがたいものであった。そこで、鳥取県内に伝わる作品と併せて展示し、テーマ展とした次第である。

さて、沖家は寛文6年(1666)以降、幕末に至るまで八代にわたって御抱絵師として仕えているが、七代目の一峨が最も画名高く、かつ藩からも重用された画人であることが、「沖家家譜」(鳥取県立博物館蔵)等からうかがえる。彼は狩野家の門人という出自を持ち、またそれ故沖家に入ったと推察し得るが、その作風は、単に狩野派の末流として理解すべきではあるまい。江戸後期の画人にしばしば認められるように、一峨もまた当時のあらゆる画派に関心を注いで、その画風を摂取しているようである。とりわけ、琳派の酒井抱一や文人画の谷文晁らとの関係はかなり密接であったと推測され、多くの縮図を遺している。その他、柿崎家資料によって、大和絵・円山派・南蘋派・洋風画・浮世絵と多方面に触手を伸ばしていたことが理解できる。一峨の作品には、こうした江戸後期画壇の多種多様な要素が混在している。だが、それらを完全に咀嚼しきることができず、かえって不自然さを浮かび上がらせている事例も見受けられる。むしろ、彼の本領は、ごく身近な素材を手あたり次第に、しかも緻密に写しとった小品に発揮されたようである。



模騎武者像

今回のテーマ展では、写生図や画稿類を中心とする展示構成を行った。しかしながら、スペース等の制約もあって紹介できたのは一部にすぎず、加えて一峨の嫡子九阜が描いた手控えなども公開できなかったことも遺憾である。改めて機会を得て、観覧に供したいと思う。



魚介図巻(部分)

出品目録

1. 沖一峨像 池田慶行筆・沖九阜賛 岡山・柿崎家蔵
2. 沖一峨所蔵印 ”
3. 沖家伝来粉本画稿類 ”
4. 写生本 沖一峨筆 ”
5. 写生粉本図巻 ”
6. 鳥獣図巻 ”
7. 魚介図巻 ”
8. 走馬図巻 ”
9. 模騎馬武者像 ”
10. 月見遊舟図 ”
11. 観梅図 沖一峨筆・藤井高尚賛 鳥取・個人蔵
12. 業平東下り図 沖一峨筆 ”
13. 紫陽花ニ小禽図 ”
14. 薔薇小禽図 ”
15. 水禽図 ”
16. 老松日出鶴図 ”
17. 花鳥春夏秋冬図 ”



紫陽花ニ小禽図

巡回展

北房・真備・玉野の巡回展

北房会場 56.11. 5～11. 7
 真備会場 56.11.21～11.24
 玉野会場 57. 1.21～ 1.24



玉野会場風景

本館では例年普及事業の一環として、県下2・3か所を選定して巡回展を実施している。巡回展は、考古・美術工芸・文書・刀剣・甲冑・備前焼・民俗各部門の館蔵資料を活用して「岡山県の歴史と美」を広く県民に紹介するもので、本年度は上記の期間中、北房町中央公民館・真備町中央公民館・玉野市総合文化センターの3会場で開催公開した。地元教育委員会の協力で各会場とも好評を得、多くの方々に熱心に鑑賞して頂いた。展示品目及び点数は、資料の運搬・管理等で限定されるが、開催地と関係深いものを含めて精選した。本年度の展示品目は以下の通りである。

- 考古 ナウマン象化石（倉敷市下津井沖） 洪積世
 旧石器（玉野市宮田山出土） 後期旧石器時代
 製塩土器 弥生時代
 三遠式突線文銅鐸 “
 袈裟禪文銅鐸 “
 三角縁四神四獣鏡 （三国時代）
 ○石枕 古墳時代
 美術 吉備真備入唐絵詞（断簡） 鎌倉時代
 法然上人伝法絵（断簡） “
 図像抄 “
 ○宇喜多能家像 室町時代
 山林清閑図（浦上玉堂筆） 江戸後期
 妓女図（柴田義董筆） “
 青壁茅亭図（広瀬台山筆） “
 文人諸家貼交屏風（玉堂、竹田ほか） “

- 雪舟像（文晁模） 江戸後期
 工芸 蔵王権現・釈迦如来鏡像 平安時代
 菊牡丹透華鬘 南北朝時代
 草花蒔絵螺鈿櫃 江戸初期
 金工品鉄菓子器 明治時代
 文書 ○足利尊氏御教書 南北朝時代
 本蓮寺文書 室町時代
 宇喜多秀家自筆書状 桃山時代
 小早川隆景誓紙 戦国時代
 備前焼 水の子岩海底出土備前焼 室町時代
 鶴首徳利 桃山時代
 緋襷大皿 “
 刀剣 ○太刀 銘正恒 平安末期
 ○太刀 銘幸景 室町時代
 甲冑 紫糸威腹巻 “
 民俗 盤香具 江戸後期
 結髪・髪飾り道具 江戸～明治時代
 岸田吟香売薬錦絵引札 明治時代
 ○印 県指定重要文化財

成人大学講座

講座内容

テーマ	講師	開講日
博物館の仕事	主任 竹林 栄一	9/4 (金)
岡山県の甲冑	学芸員 白井 洋輔	“
古代の児島	県総合文化センター文化課 高橋 護	9/11 (金)
山陽道の宿場町	主任 竹林 栄一	“
岡山県の宿場町 (現地見学)	主任 竹林 栄一	9/18 (金)
	主事 田村 啓介	“
岡山県の彫刻	学芸員 守安 収	9/25 (金)
岡山県の港町	主事 田村 啓介	“
瀬戸内の海上交通 (特別見学) 特別展講演	主任 竹林 栄一	10/17 (土)
中世瀬戸内海交通と 備讃諸島	広島大学教授 松岡 久人	“
瀬戸内の祭祀遺跡	岡山理科大学教授 鎌木 義昌	“
備前焼の流通と時代的特色	学芸員 白井 洋輔	10/23 (金)
明治文学と岡山県	館長 富岡 敬之	“

例年実施している成人大学講座「岡山県の歴史と文化」を上表に示した講座内容で開講した。本講座は、各分野の専門家や本館学芸員を講師として、博物館資料に触れながら、または講座内容に即して現地巡検を行うなどして郷土の豊富な文化遺産を理解しようとするものである。本年度も募集人員を超える応募を受けたが、講堂収容人数等の制約で、抽選によって受講者を決めさせて頂いた。受講者には遠隔地や御年配の方が多いにもかかわらず、出席率は高く学習意欲は旺盛であった。受講後の反省会での受講生の声を要約すると、館蔵の甲冑・彫刻・備前焼などの実物資料による講座や、旧山陽道に残る史跡探訪、また特別展「海のみち——瀬戸内の海上交通——」の特別講演会などが好評であり、今後については古文書解読や刀剣に関する講座設定の要望も出され、来年度以降の指針にしたい。我々にとっても、こうした企画を契機として県民の皆様に博物館活動を再認識して頂ければ幸甚と考える。

博物館講座

本館では、毎年恒例となった『成人大学講座』に加え今年度は新たに『博物館講座』を開設した。そこでは当館のメインテーマ「岡山県の歴史と文化」にこだわらず、外部から歴史・美術・考古・民俗の各分野の専門家を講師に招いて自由に御講演をお願いした。広報期間が十分でなかったにもかかわらず、応募者は募集人員80名の約2倍にのぼり、やむをえず抽選を行った。受講者は成人大学講座同様、御年配の方が多かったが、意欲に満ち、今後検討すべき問題をいくつか残したものの、初めての試みとしては盛況であったといえよう。

講座内容

テーマ	講師	開講日
経塚—岡山県を中心に—	京都国立博物館 資料管理室長 難波田 徹	1/30 (土)
博物館の過去・現在・未来	大原美術館長 藤田慎一郎	〃
じゆん ひとがた 呪府と人形 —草戸千軒にみる 中世の庶民習俗—	広島県草戸千 軒町遺跡調査 研究所長 松下 正司	2/6 (土)
岡山の城下町	兵庫教育大学 助 教授 柴田 一	〃
赤松と浦上	岡山大学教授 石田 善人	2/13 (土)
はきものの歴史	日本はきもの博 物館主任研究員 潮田 鉄雄	〃

購入資料

○鶏香炉（正阿弥勝義）

正阿弥勝義(1833～1942)の作品の第一の特徴は精緻な写実主義にあるが、一方各種の金属素材を巧みに使い、またそれらの合金及び処理による変り金による独特の色沢を用いた色絵金工に第二の特徴を見ることが出来る。第三は鍛鉄による鉄の味を最高度に活かした金工。そして、これらに独特な象眼技術を活かし、彼独自の世界を創り出している。この鶏香炉は第一、第二の特色を良く備え、彼の技量を充分に見る事ができる。

高さ138mm 重さ830g 明治20年代の作
総銀製鶏純金青金鳥銅素銅紫銅四分一色絵高肉彫小菊
勾金生シ紐鶏鳥銅地金銀素銅紫銅色絵全体影鏤在銘吉備
中山正阿弥勝義花押印



鶏 香 炉

○太刀 銘 備州長船政光

明徳五年(1394)十月日

刃長66cm 反り2.1cm

長船派は鎌倉時代の光忠に端を発し、備前刀の主流となって絶えることなく幕末まで続いた唯一の流派である。その流れの中には次のような名だたる名匠が輩出した。光忠、長光、景光、兼光、政光、盛光、康光、勝光、忠光、清光、祐定、祐包など。政光は一國兼光、名物福島兼光、名物大兼光、名物波游兼光、名物竹股兼光、名物吉田兼光、名物相馬兼光、の数々の名物刀を生んだ初代兼光の直系の弟子である。

本館資料として鎌倉時代中期の伝長光の刀と室町末期の末備前清光の刀の間の空白である南北朝～応永備前を補う格好の刀剣と云えよう。この太刀(厳密に言えば小太刀の範疇に入ろう)は庄内藩酒井家伝来で、拵もそれにふさわしい優品である。

○紙本墨画 山水人物図 古市金峨筆 6曲1隻
 筆者の金峨(1805~1880)は児島郡尾原村(現倉敷市)出身の画家。17,8歳で上洛し、同じ倉敷出身の岡本豊彦の内弟子となって四条派を学んだ。天保年間のはじめに帰郷して画房を開き、画作に励む一方、門弟を育成した。晩年は南画をとり入れて画風を一変している。なお、落款がく六金く流れ金・入金く八金くと制作年次に伴って変化している。

本図は京画壇で「山水は豊彦」と高く評価された師の画風をよく受け継いだ山水画の大作で、大画面を巧みにまとめてよくその本領を発揮している。また背景には金砂子を刷くなど装飾的な効果にも配慮が認められる。そのことは一般に力作と珍重される純四条派時代のく入金く落款が記されている点からも首肯できよう。

昭和56年度受贈資料

○刀剣拵製作工程実物資料一括

倉敷市 藤沢 要

1. 形取り(原木ホウの木)
2. 引割り(2枚におろす)
3. 張面仕上げ(糊をつける面をカンナがけする)
4. 刀身形取り, 肉取り, 油溜彫り
5. 貼合せ(両面を彫って, そくいで帖合せる)
6. 白鞘仕上げ
7. 菱紙用和紙折り
8. 菱紙
9. 鮫皮
10. 柄巻組紐

○刀剣鐺(山上コレクション) 139点

岡山市 山上丑之助

室町時代から幕末にかけての鉄鐺を中心に戦前から長期に渡って収集したものである。平安城透, 明珍, 春田, 信家, 正阿弥, 金家, 赤尾, 応仁鐺, 尾張鐺, 肥後鐺, 薩州鐺, 南蛮鐺等々に分類できそうである。

○備前焼壺(県指定重要文化財)銘(器底)

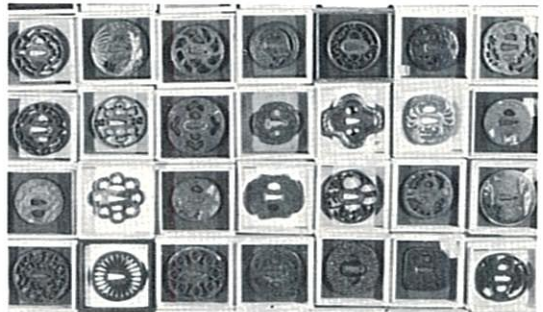
慶長拾五年九月廿八日小右衛門(押花)
 高さ 29.4 cm 口径 16.3 cm

和気町 安東仙之介

それ以前隆盛を極めていた壺の形式では最終段階に入るもので、室町末期の文様・器形・成形技法がよく残っており、焼成は桃山時代の明るさが表わされている。多分室町時代に活躍した陶工がなお桃山時代の流れの中で作陶したと思わせる程、二つの時代の要素を含んでおり

備前焼の歴史を語る資料として興味深い。なお県指定重要文化財が寄贈されたのは今回が初めてである。

- 訴状 1通 美作町 小林 泰
- 太政官日誌(1~23) 1冊 横浜市 斎藤神助
- 千玄室書状(河本又七郎宛) 1幅 岡山市 藤原徳治
- 船筆筒 1点 " "
- 吉備郡真金村出身大月岩次郎花菱関係資料 7点 富田林市 浦上智子
- 太政官布達高札 1枚 岡山市 森川繁乃
- 農具(穴あけ等) 4点 岡山市 家守 強
- バリカン・手燭 2点 瀬戸町 藤原勝彦



鐺



慶長拾五年銘備前焼壺

以上、貴重な資料の寄贈をうけました。長く大切に保管し、本館展示の充実に活用させていただきます。ここに寄贈者のご芳名を記し、厚く御礼申し上げます。

岡山県立博物館だより

No. 18

発行日 昭和57年3月31日
 発行者 岡山県立博物館
 館長 富岡 敬之
 岡山市後楽園1-5
 ☎(岡山)72-1149